令和5年度 播磨町郷土資料館 特別展

大中遺跡の土器群

―61年前の歓喜―

大中遺跡の土器群イラスト画：小東 恵朗

令和5(2023)年　播磨町郷土資料館

ごあいさつ

昭和37(1962)年に大中遺跡が発見されて以来22次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代の遺構や遺物が多数発見されました。これらの成果から、昭和42(1967)年には国指定史跡に指定されました。その後、遺跡公園として整備が進められ、現在では多くの方々に親しまれています。

今回は、昭和37(1962)年～昭和38(1963)年に、大中遺跡として初めての本格調査(1～3次調査)時に発見された「第1～3土器群」の出土品や性格について紹介します。大きな特徴として「第1～3土器群」からは大量の遺物が出土し、当時の調査員達を歓喜させたようです。ご来館の皆様に、当時の歓喜を感じていただけるように意識して展示しましたので、土器群から出土した圧巻の遺物量を是非ご覧ください。

先人が残した多くの出土品をご覧いただき、弥生人のくらしに触れて、今まで以上に大中遺跡に関心を持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、本展にご協力賜りました関係機関と各位にお礼申し上げます。

令和5(2023)年10月　　播磨町郷土資料館 館長　水野 洋子

例言・凡例

・この冊子は、令和5(2023)年10月7日(土)～令和5(2023)年12月3日(日)に開催する特別展「大中遺跡の土器群 -61年前の歓喜-」の展示図録である。
・展示品については、別紙目録に所蔵先・点数等を記載した。
・本展は大川康裕(当館学芸員)が主担当し、乗本愛実(当館学芸員)、高瀬敬子(当館整理員)が補佐した。
・遺物写真撮影は大川が行った。
・本文は大川が執筆した。なお、復元イラストはアプライドアート工房 小東憲朗氏が、図録土器イラストは藤川千尋が作成した。
・展覧会の開催にあたっては、後述の機関並びに個人の方々にご協力・ご援助を賜りました。記して感謝の意を表します。(50音順、敬称略)

協力機関

公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター、公益財団法人広島市文化財団、兵庫県立考古博物館

協力者

淺原重利、深井明比古、深江英憲、藤原清尚、藤原怜史、森岡秀人

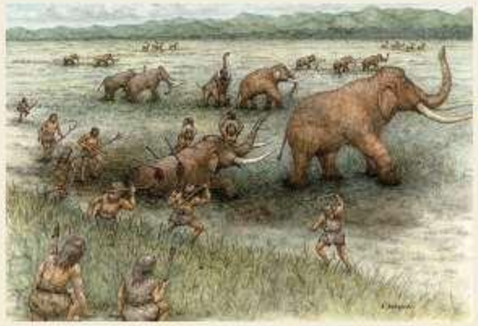
土器洗浄・復元等整理作業参加者

浅原真由美、牛島三夫、鎌田由紀子、坂江真由美、溝口操、古川一

大中遺跡のはじまり

土器が発明されていない今から2～3万年前は氷河期で瀬戸内は陸地となっていました。旧石器人は石器を木にくくりつけて狩りの道具を作り、季節移動するナウマンゾウやオオツノジカなどの狩りをしました。動物たちは季節移動する際に、大中遺跡・山之上遺跡の西側の低い場所を通路として通ることを旧石器人は知っていたのでしょう。けもの道に大きな穴を掘り、沼のようにしてそこにはまったナウマンゾウを全員が力を合わせて仕留めたことでしょう。

獲物の動物は解体され、肉は食料、皮は服などに、骨は道具に加工されて余すところなく大切につかわれました。その際に使う道具は石器です。旧石器人はこれらの石器の道具袋に入れて大切にしていたと思われます。これらの石器が大中遺跡や山之上遺跡から見つかっています。



1 ナウマンゾウを狩る旧石器人　小東憲朗画

大中遺跡が歩んだ61年

大中遺跡は昭和37(1962)年当時中学生だった浅原重利、大辻真一、大辻要二の3名により発見され61年が経過しました。その後、昭和47(1972)年12月から平成27(2015)年までの24次におよぶ発掘や整理作業が行われました。発掘の結果、遺跡は8万㎡で、竪穴住居跡は140棟以上の存在が確認され、大型や小型、円形、方形、長方形、多角形など、あたかも弥生時代の住宅展示場のように様々な形があることが特徴です。この他に多数土器とともに、内行花文鏡片、鳥形土製品、鏡形土製品、鉄製品などが出土したことが特徴です。調査成果は『播磨大中』『大中遺跡の研究』など多数の報告書が刊行されるとともに、昭和42(1967)年には国史跡に指定されて播磨町のシンボルとして皆さんに愛され、文化財保護継承の場としても使われています。

また、兵庫県立考古博物館では平成30(2018)年から「大中遺跡調査研究活用プロジェクト」を開催実施してきました。明石川から加古川下流域の同時代の遺跡を考察した結果、大中遺跡が最も大きくなった弥生時代後期は自然災害、人口増加などにより周辺集落などが安全で広い場所に移ってきた可能性もあることなどがわかってきており、現在も研究が進んでいます。

2 初期の発掘調査風景（スコップを振るう学生参加者）

3 初期の発掘調査風景（上裸で掘る作業員）

The Onaka ruins

土器群

大中遺跡の土器群

昭和37(1962)年に大中遺跡が発見され、同年12月25日～翌昭和38(1963)年1月15日に行われた第1次調査を皮切りに第2次調査(昭和38(1963)年3月17日～4月8日)、第3次調査(昭和38(1963)年7月12日～8月19日)と立て続けに発掘調査が実施されました。

これらの調査に参加した学生たちを興奮と歓喜に沸かせた出来事がありました。ある特定の遺構から土器などの遺物が集中して大量に出土したのです。大量の土器片が埋まる中に完形の土器が点々と顔を出しており、様々な時期の多種にわたる遺物が発見されました。この発見は以降現在にわたり大中遺跡のみならず播磨地域における弥生時代後期の研究に多大な影響を与えました。当時の調査員・研究者はこの遺構を「土器群」と名付けました。

「土器群」って何？？

現在の播磨町で、今から約1800年前の弥生時代終末期に最盛期を迎えた集落遺跡、これが大中遺跡です。これまでの調査で住居は140棟以上が発見されましたが遺跡の約80%が未調査のままであることから、全体では約250棟の住居があるものと想定され、約200年といわれる集落存続期間に新規、廃絶、建替えが繰り返されていたことがわかっています。この集落では常時10～20棟の竪穴住居が建ち、人口にして50～100人が居住していたと考えられています。ここに居住する住民が生活する過程で発生したゴミ、特に土器をメインに廃棄していた場所、それが「土器群」です。現在で言うところの「街のゴミステーション」と同義の存在なのでしょう。また土器を廃棄する行為には様々な要因が考えられており、引っ越し、自然災害等の被災、祭祀(廃棄祭祀)などがあります。

本展で取り上げた第1～3次調査で発見された土器群は、竪穴住居が廃絶された後にゴミ捨て場として利用され形成されているのが特徴です。

土器群には当時の人々が年月をかけて廃棄した土器や石器などが層を成して堆積しています。現在の私たちは土器群から出土した遺物を詳しく調べることで、大中集落がどのように営まれ廃絶されていったかを知る手掛かりを得ることができます。考古学者にとって、大昔のゴミ捨て場は宝の山なのです。

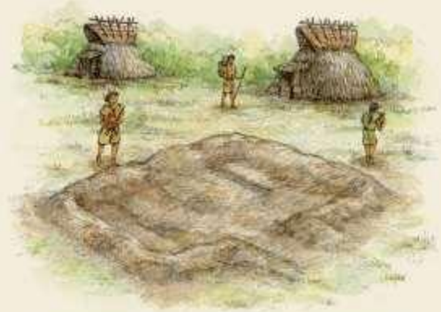
4　大中遺跡・山之上遺跡で見つかった竪穴住居跡『弥生集落転生ー大中遺跡とその時代』2022 兵庫県立考古博物館を一部改変

「土器群」ってどのようにできるの？

大中村にまた新しい住人が引っ越してきました。村人総出で家を建てています。建てられている住居は2本柱が特徴の「室岡型住居（北部九州～瀬戸内海沿岸に広く分布）」です。

家が建ち、大中村での生活が始まりました。男の人は農業や狩り、漁などに精を出し、女の人は採集、土器作りや糸を紡いで服を編んだりして過ごしたことでしょう。

竪穴住居の耐久年数は約20年といわれています。約20年ここに住んだ家族は村の違うところに新たに居を構えました。古い住居は解体され、まだ使えそうな部材は再利用し無駄なく消費されていきます。



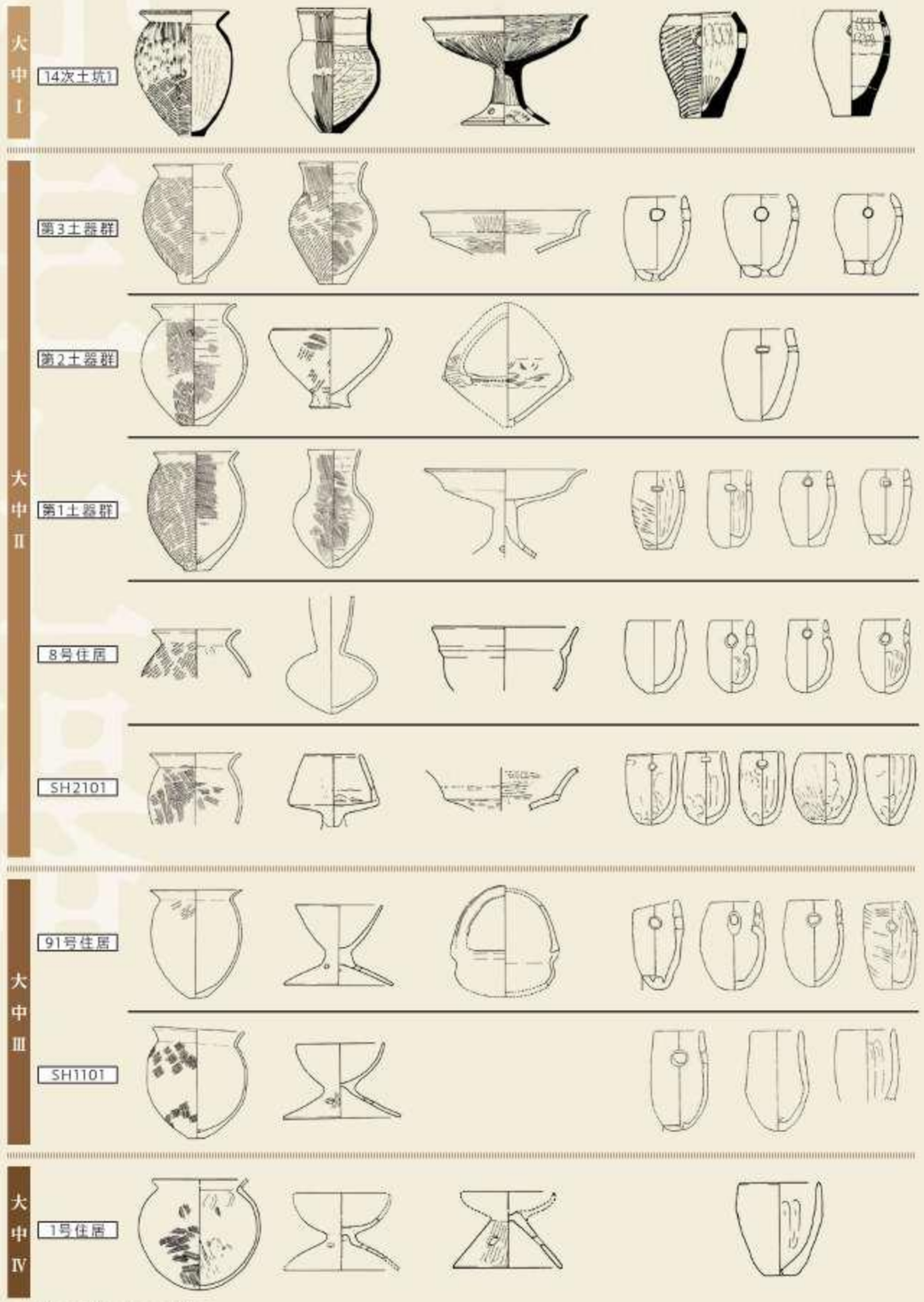
上屋がなくなった住居は、竪穴部分を残すのみとなり数年をかけてゆっくりと土に埋もれていきます。

数年かけて埋もれた場所はちょうど好い感じのくぼ地となっており、いつしか近隣住民のゴミ捨て場として使用されます。約100年間ゴミ捨て場として機能し集落の終焉とともに土に埋もれていきました。

それから約1800年後、3人の中学生により大中遺跡が発見されました。これを機会に実施した1～3次調査において第1～3土器群が発見されました。

5　土器群の形成過程

大中遺跡における弥生土器の変遷



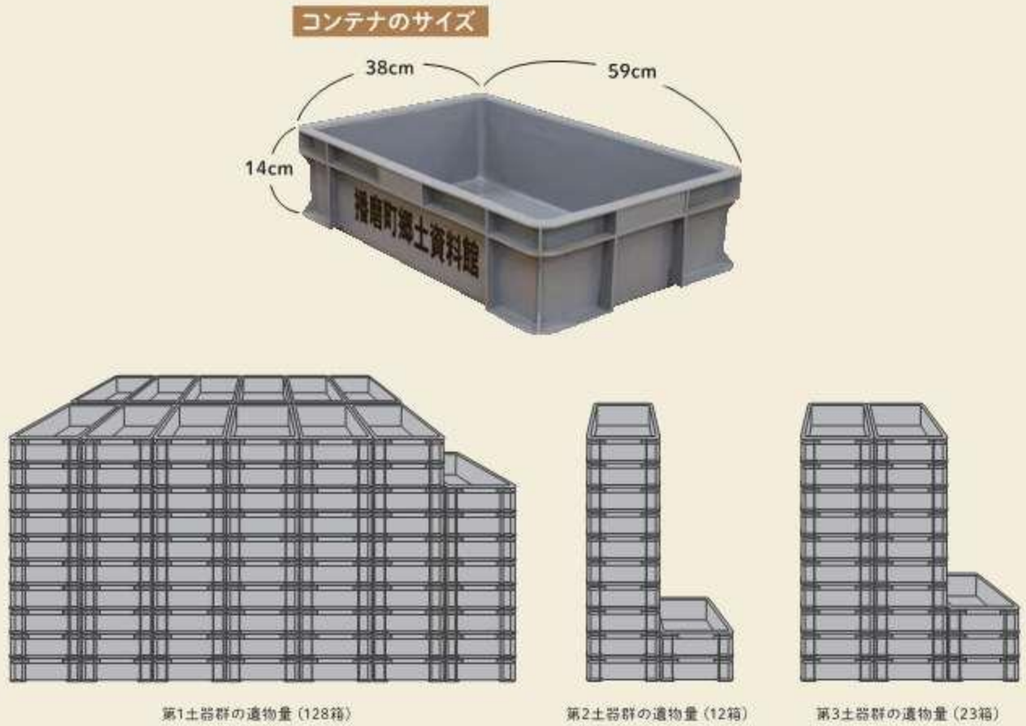
6 大中遺跡出土土器の変遷

土器群から出土した遺物の量

遺跡発掘調査で出土した遺物は、「コンテナ」と呼ばれるプラスチック製箱に収納され保管されます。調査員は遺構などから出土した遺物量をこの箱数で、「第○号住居跡からは遺物がコンテナ5箱分出たよ。」とか、「この遺跡からはコンテナ100箱の遺物が出土しました。」などと出土遺物のボリュームを表現します。

大中遺跡で行われた調査のうち、初期に行われた第1～3次調査（昭和37（1962）～昭和38（1963）年）は集落中心部で行われた大規模なものとなりました。これらの調査で発見された遺物の大半が第1、第2、第3土器群から出土したもので、その遺物量は計163箱を数えます。これは集落遺跡調査で出土する総遺物量に相当し、たった3つの遺構からこれほどのボリュームの遺物が出土することは珍しいです。

7 コンテナ保管状況（播磨町郷土資料館）



8 土器群の遺物量

第1土器群

昭和37(1962)年12月25日、第1次調査初日に発見されました。大中遺跡の調査・研究成果をまとめた「大中遺跡の研究」(播磨町教育委員会1990)では、本遺構発見の瞬間を「参加した生徒達を興奮させ、歓喜させた」と記して当時の熱い高揚を伝えています。

廃絶された竪穴住居跡(第1土器群下部住居跡)に多量の土器等が廃棄されていました。住居跡の埋没過程及び土器群の堆積過程の詳細な把握を試みましたが、調査時に出土した遺物を一括で取り上げていたためできませんでした。

出土遺物量は本遺跡検出遺構の中で最も多く、コンテナ128箱を数えます。

第1土器群

多量の土器の他に炭化木、礫などの遺物が不規則で雑然とした状態で検出されました。土器は、完形、破片を含み多様な器種が出土しており、割合順に甕、壺、高坏、鉢、甑、器台、小型土器、特殊土器が確認されています。特殊な土器として大型把手があり器種、用途ともに不明ですが、そのサイズから考えられる特殊性が注目に値します。遺物は弥生時代後期～終末期のものが混在しており、土器群の堆積状況から2度の利用盛期がうかがえます。

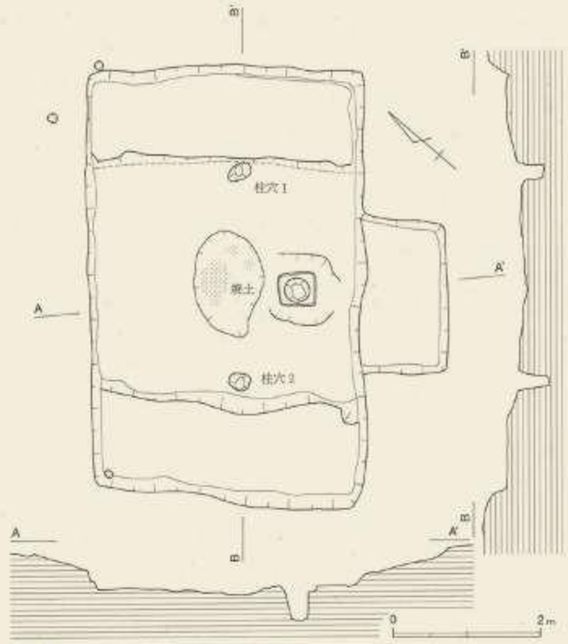
第1土器群下部住居跡

遺構規模は長軸585cm、短軸375cm、深さ45cmを測り、平面形は長方形を呈し南東側に出入口と考えられる張り出し部があります。室岡型と呼ばれる住居で2基の支柱穴が中央部長軸方向に穿たれており、中央部に炉跡と住居内土坑それぞれ1基が付帯します。これは北部九州を中心に瀬戸内海沿岸に分布する住居形態です。出土遺物は、第1土器群と本遺構が明確な線引きの元に調査されていなかったため不明ですが、遺構形態から弥生時代後期と考えられます。

9 第1土器群

10 第1土器群下部住居跡

11 第1土器群平・断面図



12 第1土器群下部住居跡平・立面図

13 第1土器群出土遺物集合

14 高坏(第1土器群出土)

15 把手(第1土器群出土)

16 甕(第1土器群出土)

17 甕(第1土器群出土　讃岐産)

第2土器群

本遺構は第1次調査で発見されました。第1次調査で土器群部、第2次・3次調査で下部住居(第5号住居跡)の調査が実施されました。

遺物の出土状況から第1土器群同様、竪穴住居跡(第5号住居跡)が廃絶され、後に多量の土器等が廃棄されたことがわかります。出土遺物は調査時に上～下層を一括で取り上げていたため、遺物から埋没の過程を詳細に辿ることはできませんでしたが、下部住居の第5号住居跡床面直上から出土した遺物は記録のうえ取り上げられていたので、当住居跡の年代を計る良好な資料となりました。

遺物は第2土器群からコンテナ11箱、第5号住居跡からコンテナ1箱出土しています。

第2土器群

大半の土器が廃棄以前に破壊されており完形となる個体は極少数でした。器種は割合順に甕、壺、高坏、鉢、器台、小型土器、甑、特殊土器が確認されています。甕や壺などの日常的に使用されていた器種の他に、山陰型甑形土器(甑?煙突?)とも考えられる大型で特殊な土器も発見されています。出土遺物から本土器群の使用年代の最盛期は弥生時代後期後半～終末期と想定されます。

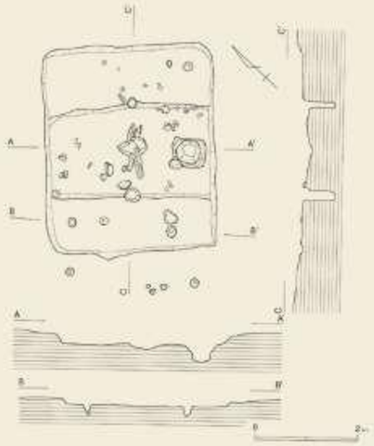
18 第2土器群

19 第2土器群平・立面図

第5号住居跡

遺構規模は長軸394㎝、短軸327㎝、深さ31㎝を測り、平面形は長方形を呈し北西側に出入口があったと考えられます。室岡型住居で支柱穴2基が中央部長軸方向に穿たれており、中央部に炉跡、中央部奥に住居内土坑それぞれ1基が付帯します。想定出入口からみて両側にベッド状遺構がありその段差は17～25㎝を測ります。遺物は、床面直上より完形鉢9点、砥石3点、台石1点などが出土しました。年代は弥生時代後期後半と想定されます。

20 第5号住居跡



21 第5号住居跡平・立面図

22 第2土器群出土遺物集合

23 器台（第２土器群出土）

24 大型鉢または山陰型甑形土器（第２土器群出土）

25 第５号住居跡出土遺物集合

26 鉢（第５号住居跡出土）

27 鉢（第５号住居跡出土）

第3土器群

第1次調査開始3日目の昭和37（1962）年12月27日に発見されました。調査は継続的に第2次、3次調査まで行われ、上部の土器群、下部住居跡の調査が実施されました。

遺物の出土状況から第1、2土器群同様、竪穴住居跡が廃絶され後に多量の土器等が廃棄されていました。出土遺物は調査時に上～下層及び住居跡のものを一括で取り上げられていたため、遺物から埋没の過程を詳細に辿ることはできませんでした。

遺物はコンテナ23箱出土しています。

第3土器群

土器は完形、破片を含み、器種は割合順に甕、壺、高坏、甑、器台、鉢、小型土器が確認されています。特徴的な遺物として大型容器の把手部分が出土しています。これは青銅器鋳造で用いられた高坏状土製品である可能性がありますが、今のところ確実なことはわかっていません。出土遺物から年代は弥生時代後期～終末期と想定されます。

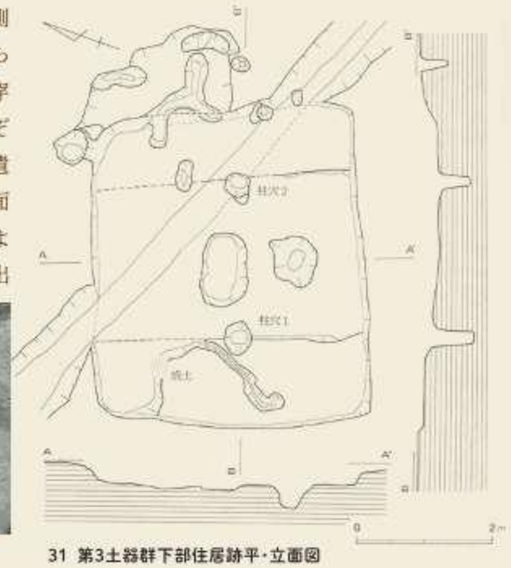
28 第3土器群

29 第3土器群平・立面図

第3土器群下部住居跡

遺構規模は長軸470cm、短軸410cm、深さ18～24cmを測り、平面形は長方形を呈し北側に出入口があったと考えられます。室岡式住居で、支柱穴2基が中央部長軸方向に穿たれており、中央部に炉跡、中央部奥に住居内土坑それぞれ1基が付帯します。想定出入口からみて両側にベッド状遺構がありその段差は1～10cmを測ります。出土遺物は、床面直上より遺物は出土しませんでしたが、ベッド状遺構直上より焼土塊が検出されています。用途詳細は不明ですが検出状況からそこで燃焼させてはいないようです。遺構形態から年代は弥生時代後期前半と想定されます。

30 第3土器群下部住居跡



31 第3土器群下部住居跡平・立面図

32 第3土器群出土遺物集合写真

33 細頸壺(第3土器群出土)

34 広口壺(第3土器群出土)

35 鉢(第3土器群出土)

36 球形土製品(第3土器群出土)

まとめ

本展では大中遺跡の第1～3土器群を題材としました。調査当時に行われた整理作業において判明したことをベースとし、現在の研究水準の元、遺物を見直す再整理作業を行いました。

得られた成果のうち特筆すべきこととして、特殊な形状の土器が数点含まれていることが挙げられます。第1土器群より出土した把手(写真図版15、展示目録25)は、形状やサイズから相当大型な容器に付随するものと想定されます。時代や容量を勘案すると「高坏形土製品」の可能性があります。しかし「高坏形土製品」は鋳銅時に銅を溶かし鋳型へ流し込むための容器として使用されていたことから、本遺物を高坏形土製品とするには大中遺跡より銅滓や鋳型などの鋳造関連遺物が発見されるべきですが、現状その発見はなされていません。また、本遺物と同形状の把手を持つ高坏形土製品が確認されていないことが問題点として挙げられます。

第2土器群で出土した「大型鉢または山陰型甑形土器」(写真図版24、展示目録32)について、発見当初は「大型鉢」として取り扱っていましたが、把手は下向きに付いていた可能性があり、厚くなるはずの底部付近の厚みが薄く狭口部へ続くとも考えられることから、本遺物は「山陰型甑形土器」の可能性があることがわかりました。「山陰型甑形土器」とは、煙突とも甑ともいわれていますが実のところその用途はわかっておらず、使用時の上下方向すらも分からない土器で、全国出土数の約75%が鳥取県・島根県から出土しています。もし本遺物が「山陰型甑形土器」であれば、大中遺跡が山陰地方と交流していた可能性が高くなります。

以上、成果を述べましたが謎は完全に解明されず、まだ道半ばです。今後の大中遺跡及び他地域遺跡の研究が進展することで、これらの謎が解明されることを強く望みます。

大中遺跡研究の現在と今後の課題

大中遺跡は昭和37(1962)年に発見され昨年の令和5(2023)年で発見61年を迎えました。第1次から24次にわたる調査が居住域を中心に実施され、鉄、赤色顔料(ベンガラ)使用、工房が存在する可能性、他地域との交流・交易など様々なことが研究により明かされ分かってきました。また周辺地域の集落分布から、自然災害から逃れるために他集落から大中遺跡に移り住んできた可能性も考えられるなど、播磨地域史としての大中遺跡研究も進展しています。

播磨町郷土資料館も令和2(2020)年より大中遺跡出土遺物の再整理を進めており、令和4年時点で「龍」、「女性器」を象ったものをはじめ21点の絵画土器が発見されるなど、大中遺跡研究の進展及び本遺跡の価値の向上に寄与してきました。また、再整理は現在も継続しており今後更なる発見が期待されます。

今後の課題は、本特別展に係る整理を進めるにあたり改めて痛感したこととして、本館が所有する遺物の再整理の必要があります。報告書等に掲載されている主要遺物は辛うじて整理された状況にありますが、未整理遺物や帰属遺構の不明な遺物など「見直し」の必要がある遺物が収蔵庫にはまだ眠っています。また発見当時ではわからなかったことが、研究や技術の進歩した現在ではわかったり気付いたりすることも多々あります。こうした再整理に着手することにより、本特別展では為し得なかった遺構の更なる詳細分析が可能になると考えています。その他、大中遺跡には水田などの生産域、墓を構築する墓域といった集落として不可欠な要素が未確認のままとなっています。今後の調査でこれらが解明されれば大中遺跡研究の飛躍的な進展が期待されます。

このように発見から61年経過した現在も弥生時代研究における大中遺跡の存在感は、新発見とともに昭然と示し続けており、同時に近隣住民からは播磨町の「代名詞」としても長く知られる存在となっています。今後も播磨町の「宝」として親しまれ、愛される大中遺跡を守り継承していきましょう。

考古学年表

◎:国指定　○:県指定　△:市・町指定

年代	時期区分		播磨町・播磨地域の主な遺跡など
3万年前	旧石器時代	前期	藤江川添遺跡(明石市) 西八木遺跡(明石市)
B.C14000		中期	△大中遺跡(播磨町)・山之上遺跡(加古川市)／石器
		後期	西脇遺跡(明石市)
B.C7000	縄文時代	草創期	
B.C4000		早期	○福本遺跡(神河町)
B.C3000		前期	△大歳山遺跡(神戸市)
B.C2000		中期	
B.C1000		後期	丁・柳ケ瀬遺跡(姫路市) 片吹遺跡(たつの市)
B.C600		晩期	日笠山貝塚(高砂市)
B.C300		(早期)	今宿丁田遺跡(姫路市)
A.D.1	弥生時代	前期	新方遺跡(神戸市) 美乃利遺跡(加古川市)
		中期	玉津田中遺跡(神戸市) 養久山・前地遺跡(たつの市)
		後期 終末期	◎大中遺跡 住居／土器
300	古墳時代	前期	西条52号墳(加古川市) ○養久山1号墳(たつの市) ◎丁瓢塚古墳(姫路市) ◎吉島古墳(たつの市)
400		中期	○愛宕塚古墳 ◎西条古墳群(加古川市) ◎五色塚古墳(神戸市) ◎石の宝殿及び竜山石採石遺跡(高砂市)
500		後期	○西宮山古墳(たつの市) 平荘湖古墳群(加古川市)
600	飛鳥時代		◎鶴林寺(加古川市)
700	奈良時代		◎播磨国分寺跡(姫路市) 古大内遺跡(加古川市) 古代山陽道推定地 ○西条廃寺(加古川市)
800			
900	平安時代		太寺廃寺(明石市)
1000			
1100			魚住古窯址群(明石市)
1200			福田片岡遺跡(たつの市)
1300	鎌倉時代		◎鶴林寺本堂(加古川市)
1400	室町時代		◎白旗城跡(上郡町) 城山城跡(たつの市) 本在蓮花寺構居跡 濠跡／青磁など ◎感状山城跡(相生市) ◎置塩城跡(姫路市)
1500	戦国時代		
1600	安土桃山時代		
	江戸時代		今里傳兵衛／新井用水　◎姫路城跡(姫路市) ◎明石城跡(明石市)
1700			梅谷七右衛門／庄屋職　○高砂塩川湊及び工楽松右衛門旧宅(高砂市)
1800			ジョセフ・ヒコ／新聞発行
1900			別府鉄道／開通　◎播州葡萄園跡(稲美町)
2000	近代・現代		

The Onaka ruins

特別展
大中遺跡の土器群
―61年前の歓喜―

令和5(2023)年10月7日発行

編集・発行　播磨町郷土資料館

〒675-0142
兵庫県加古郡播磨町大中1-1-2
TEL 079-435-5000
FAX 079-436-0135

印刷:株式会社六甲商会

[ホームページ]